

伊那谷研究団体協議会 第28回シンポジウム

昭和100年 今に残るもの、その心を考える

— 飯田下伊那の多様性をもとめて —

日時 令和8年2月15日(日) 午後1時30分(開会)

会場 飯田市美術博物館 2階講堂 開場・受付 午後1時

主催 伊那谷研究団体協議会 後援 飯田市教育委員会

日程・次第

開会 13:30 ~ 13:40 10分 司会進行:村松 武 事務局長

開会挨拶 伊那谷研究団体協議会副会長 小林 正春

主催者挨拶 伊那谷研究団体協議会 会長 松上 清志

来賓祝辞 飯田市教育長 熊谷 邦千加 氏(予定)

研究発表 13:40 ~ 15:10 90分

「地域方言の飯田弁が育んだ意義と価値」

『飯田弁に見る飯田人の流儀』著者 井坪 幸一(風越亭半生)氏

「下伊那に残る青い眼の人形」

高森文化ユニット 唐木 孝治 氏

「中央構造線を掘り抜き、国内ニッケルの生産に挑んだ八重河内の天竜

鉱山」 金属・鉱物の会 田中 良 氏

全体会 15:20 ~ 16:00 40分

パネリスト 発表者(井坪 幸一氏、唐木 孝治氏、田中 良氏)

コーディネーター 松上 清志

情報交換・閉会 16:00 ~ 16:30 30分

加盟団体事業案内及び情報交換

閉会挨拶 副会長 小林 正春

※発熱など体調不良の方はご遠慮ください。また、流行する感染症にはご注意ください。

シンポジウムの趣旨

本年は昭和 100 年、戦後 80 年という一つの区切りの年であった。そこで、4 年続けてきた「飯田下伊那の文化遺産を彩る人びと」という中心テーマを、「昭和 100 年、今に残るもの、その心を考える」に変更した。それは昭和 100 年を振り返って、今後に残したいもの、消え去るとしても記憶に遺していきたいものを見つめていきたいと考えたからである。

しかも、様々な研究団体をお願いして発表し合う伊研協のシンポジウムにおいては、自然環境・文化財などにおける飯田下伊那の特徴の一つと考える多様性も明らかにできるのではないかと期待している。

研究発表の要旨

「地域方言の飯田弁が育んだ意義と価値」

『飯田弁に見る飯田人の流儀』著者 井坪 幸一 氏

地域方言として屈指の成熟した言語体系を持つ飯田弁は、地域の文化の結晶体であり、かつまた発展の原動力であった。その背景にある地理的な要因や、柔軟にして優美な飯田人の精神生活などを顧みることによって、向後への指針としたいものである。

「下伊那に残る青い眼の人形」 高森文化ユニット 唐木 孝治 氏

昭和 100 年、戦後 80 年を数える歳月が流れている。昭和 2 年、日本の子供たちへと 12000 体余りの人形が、日米親善大使としてアメリカからやってきた「青い眼の人形」である。その多くは、昭和 16 年太平洋戦争が始まり、敵国の象徴となつて、悲しい運命にさらされ、姿を消していった。そんな数奇な運命をくぐりぬけ、下伊那に現存する、いくつかの「青い眼の人形」を通して、下伊那に漂う人形文化を見つめ直してみたい。

「中央構造線を掘り抜き、国内ニッケルの生産に挑んだ八重河内の天竜鉱山」

金属・鉱物の会 田中 良 氏

太平洋戦争前、八重河内の青崩峠周辺ではニッケル鉱の探鉱・開発が大規模に行われていた。この天竜鉱山は、それまで需要のすべてを海外に依存していたニッケルの国産化を目指すもので全国的に注目されていた。

加盟団体：飯田昆虫友の会、南信州文化財の会、伊那史学会、伊那谷自然友の会、伊那谷地名研究会、金属・鉱物の会、下伊那教育会郷土調査部、下伊那考古学会、竜丘古墳の会、はなのき友の会、柳田國男記念伊那民俗学研究所、ふるさと文学碑研究会、恩がえし I I L A、飯沼天神塚雲彩寺古墳保存会、高森文化ユニット、春近五人衆・井上井月研究会

伊那谷研究団体協議会ウェブサイト：<http://inadani-kenkyo.com> 伊那谷研究団体協議会で検索可

お問合せ・連絡先：事務局長 村松 武（美博 0265-22-8118）